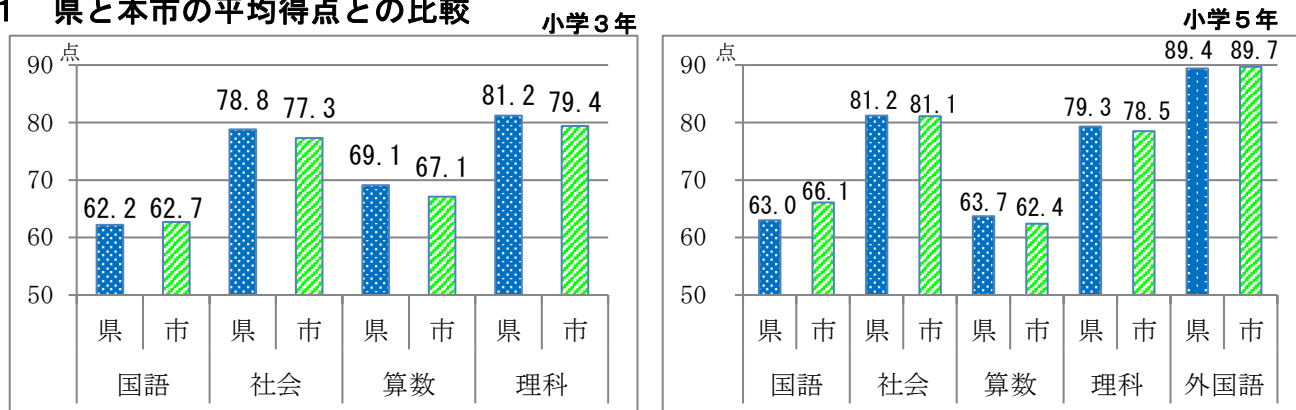


令和4年度千葉市学力状況調査結果概要（小学校版）

1 県と本市の平均得点との比較



2 各教科の改善策

【国語】 学習内容と実生活を結びつけて考えられるような学習活動の工夫

小学3年

- 実生活で活用できる知識を身に付けるため、言語活動を通して継続的に語彙を身に付けることができるようにする。国語辞典は日頃から活用することで、その有用性を感じられるようにする。
- 文章を構成する力を育成するために、組み立てメモを活用して友達との意見交流をすることで、まとまりや順序を考えることの効果を感じられるようにする。

小学5年

- 実生活で使う頻度が低い言葉を読んだり、書いたり、また正しい敬語を用いることができない傾向があるため、新たな語彙について学ぶ時間だけでなく、継続的にそれらの言葉を活用する場면을意図的に設定する必要がある。
- 目的や意図を意識しながら主体的に話し合いが行われるよう、単元の導入時に児童の実態を具体的に捉え、関心や疑問を大切にしながら、課題解決的な学習計画を立てることを重視する。

【社会】 資料や話し合い活動から考えたことを基に、自分の意見をまとめる機会の充実

小学3年

- 千葉市の地図から読み取った地形や交通の広がりなどをもとに、自分たちの生活や見学してきた実際の様子と結び付けながら、実感をもって土地利用について考えることができるようにする。
- 学習問題に対して、自分で調べたり、友達と話し合ったりしたことをもとに、自分でまとめる考える時間を意図的に設定することが重要である。

小学5年

- 情報ネットワークの良さと活用の仕方に関連付けて考える等、資料から読み取ったことをもとに、自分たちの生活にどのように関わっているのかについて考え、表現する場면을意図的に設定していくことが必要である。
- 複数の資料や立場を踏まえて、社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考えられるような場面を設定するとともに、そこから考えられることを自分の言葉でまとめ表現する活動を、意図的に学習へ取り入れていく必要がある。

【算数】 問題解決の過程や考えの根拠を明確にした数学的活動の一層の充実

小学3年

- 解決の過程や根拠について表現する時間を、子供一人一人が確保できるように意識して指導していくことが大切である。
- 様々な観点から表やグラフ等を読み取る機会を設け、そこから読み取った自分の考えを表現する機会を十分に確保することが大切である。

小学5年

- 低学年のうちから図形を切る・折る・移動する・裏返すなどの操作的活動の時間を大切にし、豊かな発想で問題解決ができるようにし、図形の性質について考察する力を少しずつ積み重ねていく必要がある。
- 分数を用いた計算において、整数を分数に直し、さらに通分するなどの計算の習熟を図るとともに、整数と分数の関係を図で表したり、計算の根拠を表現する活動を取り入れたりするなど、丁寧な指導や支援をしていく必要がある。

【理科】 実感を伴った理解に繋げるための工夫

小学3年

- 日常生活においても、学習したことを確認する時間を意図的に設け、実感を伴った理解ができる機会を繰り返し設定する。
- デジタルによる数値で重さを比べるだけでなく、「手ごたえ」や「てんびん」によって重さを比べるといった機会も保障することで、実感を伴った理解に繋げていく。

小学5年

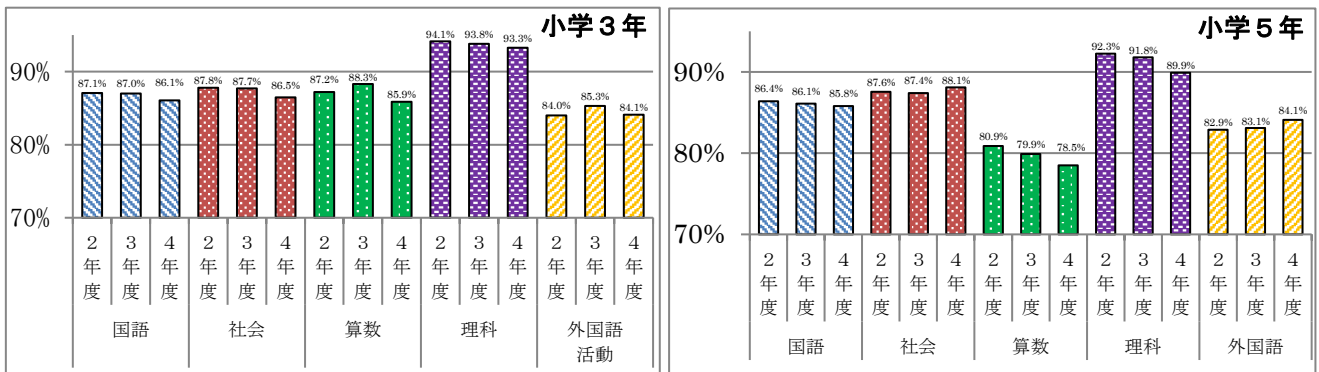
- 「条件を制御する」という理科の見方・考え方を意識した学習を重視する。
- 実験や観察の時間を保障し、追究する時間を確保することで、実感を伴った理解に繋げていく。

【外国語】 目的、場面、状況を明確にした言語活動のさらなる充実

小学5年

- 様々な表現に慣れ親しむことができるように、ジェスチャーを用いて短くはっきりとした指示をする場面を繰り返し設けるよう工夫をする。
- 話し手の意図を推測しながら聞く機会を増やし、目的を意識して伝える場面を繰り返し設定することで、コミュニケーションを行う目的・場面・状況を工夫した言語活動を充実させていく。

3 学習に対する意識（学校の勉強がわかる）

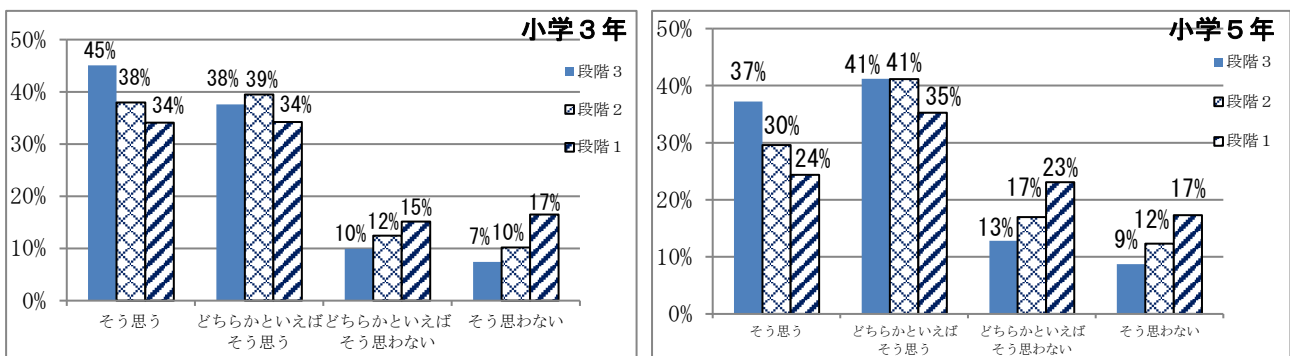


「理科がわかる」割合は89%以上

3・5年ともに、理科の学習がわかるという回答の割合が、それぞれ93.3%、89.9%と高い。前年度と比較すると、3年では、すべての教科で前年度を下回っている。5年では、社会と外国語は前年度より上回っているが、それ以外の教科では前年度を下回っている。

4 自己肯定感と学力の関連を示唆（自分に良いところがあると思いますか。）

※標準偏差により、成績上位群を段階3、成績中位群を段階2、成績下位群を段階1としている。



「成績上位群」は自分のことを肯定的に捉える傾向がある

「自分に良いところがあると思いますか」に対し、「成績上位群」は自分のことを肯定的に捉える傾向があり、「成績下位群」は自分のことを否定的に捉える傾向がある。また、学年が上がるにつれ、自分を肯定的に捉える児童が減少している。学校生活の中で、互いに認め合う場面を一層取り入れていく必要がある。